

■事業報告 第63回自然観察会 鍾乳洞を探検しよう!

平成24年9月23日(日) 龍泉洞(岩泉町)
共催: 岩泉町、日本洞穴学研究所、いわて三陸ジオパーク推進協議会



龍泉洞内立体模型



顕微鏡観察

●青碧の地底湖と漆黒のコウモリ穴体験●

第63回自然観察会が、岩泉町龍泉洞にて、日本洞穴学研究所理事柳沢忠昭氏と同研究所研究員菊地敏雄氏を講師に迎え9月23日(日)に行われました。

最初に、柳沢講師より、龍泉洞の総合的な説明があり、その後、菊地講師他より洞内・地底湖立体モデルで龍泉洞の形について解説などがありました。

次に、十数人の3班編制の総勢38名で入洞し、気温14℃前後と寒い中、講師陣からキクガシラコウモリなどの熱のこもった解説がありました。さらに、講師陣から第3地底湖の奥に巨大空間の存在が示唆され、ここで折り返しました。

地底湖から高低差約80mの空間のフローストンを見ながら、急峻な三原峠を越えました。普段なら通り過ぎるリムス

トンの水たまりの約1mm程度のトビムシ類を見て、観光コースを終えました。



リムストーンでのトビムシ類の観察

いよいよ一般立入禁止のコウモリ穴に進み、自分のヘッドライトだけを頼りに石の下のキタカミメクラツチカニムシなどを観察しました。

洞外で郷土料理の八杯汁などの昼食をとりながら、双眼実体顕微鏡で大型のメクラヨコエビの新種などを確認しました。

●枯渇する水源と巨大ドリーネ●

龍泉洞北部の安念沢の水源地带にバス

で移動しましたが、雨で沢登りを中止して猛暑で枯渇した沢水のしみ込み地点を観察しました。柳沢講師より、腐葉土等でろ過されるからこそ龍泉洞の水はきれいになると森の重要性に触れられました。最後に、江川の4つのドリーネのうち、一番小さい直径約23mのものを観察しました。このようなマクロな龍泉洞周辺の環境からミクロな生きものたちまでダイナミックな自然に出会えた1日でした。

(主任専門学芸員 藤井千春)



江川のドリーネの観察

■事業報告 第64回地質観察会

川砂から鉱物をさがす

平成24年10月7日(日) 金流川(一関市花泉町)

●地質観察会を終えて●

「これで満足しました」。いつも観察会に参加しているある参加者の感想です。2年前にも盛岡市の乙部川おとべで同様の観察会を行いました。今回は全員が採集せきえいできました。石英や砂鉄を識別しつつ洗い流し、最終的に全員で約350粒の黄金色の砂金を採集できました。

今回の地質観察会は一関市花泉町を流れる金流川で行われました。講師の北峯瑞也氏とともに4月から採集ポイントを選定し、原発による放射能汚染を懸念して、下流から上流まで放射能の値を測定し、安全であることを確かめました。

金流川の砂金は角がとれた隅丸の粒です。最大でも数mmで、1mm以下が

ほとんどです。もともと金は、鉱山などでは石英脈に付着した状況で産出します。そのため鉱脈から川に流れだしたばかりの砂金は角があるざざざした形が多いのが普通です。しかし、金流川の砂金は隅丸です。金流川の流域には金の鉱山は知られておらず、中・古生代の地層に比べたら軟らかい新第三紀の地層や岩石が分布します。構成する砂礫層されきの礫れきが中・古生代の泥岩でいがんや花崗岩かこうがんなどであることから、新第三紀の地層ができる頃に花泉周辺などにあった鉱脈から抜け出た金が流れだしたのかもしれませんが。



金流川での作業の様子(天神橋をのぞむ)

収穫の終わった水田地帯を流れる金流川で、参加者は童心にかえり、黄金色の地球からの贈り物に心を踊らせていました。

(上席専門学芸調査員 吉田 充)